
聖少女カシェリーナ外伝 もう一つの戦争

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖少女カシエリーナ外伝 もう一つの戦争

【Nコード】

N8636E

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

ニホンのカンサイ地区に住むロイとロベルトは、一儲けしようと計画し、軍の秘密兵器「クロノス」を奪取。軍は次々に奪回作戦を展開し、ロイ達は窮地に追い込まれていく。内容は深刻ですが、若干コメディ入ってます。

プロローグ

地球共和国と月連邦との間で始まった戦争——と言うよりは、ベン・ドム・ディズムとダン・ディーム・ゲスとの間で始まったと言った方が正しいかも知れない——は、一つの局面を迎えようとしていた。

「私はカシエリーナ・ダムンと言います。ガイア大学法学部の四年生です。私はある事情から、共和国政府、いえ、ディズム総帥が進行している恐るべき計画を知りました。それが昨日テレビ、ラジオ、インターネットを通じて報道され、新聞の号外に載っていた、核融合砲計画です」

戦争終結後は地球と月を救った聖女と讃えられ、大学卒業後は一体どんな道に進むのかと言われているカシエリーナ・ダムンが、あらゆるメディアを通じてディズムとゲスの非を訴えていた時に話は遡る。

カシエリーナ達はこの放送後、軍の追手から逃れるため、一時身を隠していたので知らないのであるが、実は戦争終結に大きく関わった四人の若者がいたのだ。

これからお話するのは、遊ぶ金欲しさに危ない話に乗って一儲けしようと考えた二人の少年と、その二人の身を案じてそばにいた二人の少女の物語である。

第一章 カンサイの少年と少女

カシエリーナの放送をインターネットで見ている一人の少年がいた。

彼の名前はロイ・アマギ。ニホン列島のカンサイ地区に住む、高校二年生だ。

見た目はそれほど派手でもなく、かと言って地味でもない、どこにでもいる少年だ。長い黒髪を後ろで束ね、黒のタンクトップにジーンズという出立ちだ。

彼のいるのは高校からそれほど離れていない区域のアパートで、両親から独立して仕送りしてもらわず、アルバイトなどで生活していた。

「にしても、美人だよなア、このお姉さんは」

ロイはポテトチップスをボリボリ食べながら回転椅子にふんぞり返って、ディスプレイに映るカシエリーナを見つめていた。

「そうかしら」

ソファにきちんと膝を揃えて腰掛け、そう不満そうに呟いたのは、ロイのガールフレンドのエリザベス・イトーという少女だ。

私はそんな軽い女ではありません、という雰囲気、とても堅い印象を与える白のブラウスに紺のスカート。

もちろん膝なんて見えはしない。靴は何のファッション性も感じないスニーカー。非常に珍しいブロンドの髪を肩まで伸ばし、青く澄んだ瞳をクリクリさせて、まるで恋敵を見るようにカシエリーナを睨んでいた。

「美人じゃないって言うのか？」

とロイはポテチを口にいっぱい含んだままでエリザベスの方を見た。エリザベスはバイキンでも見るような目でロイを見て、

「そうは言っていないわよ。あの人、大変なことをしているのよ。美人だとか、そうじゃないとかの論議の対象じゃないでしょ？ ミス

コンじゃないんだから」

「ま、そりゃそうだけどさ」

その時ドアフォンが鳴った。ロイはそれに反応して立ち上がり、ドアを開いた。

「よォ、ロイ。見てるか、美人のお姉さんの放送？」

と入って来たのは、ロイの小学校時代からの悪友のロベルト・トキワである。

ロイとは逆に短く刈り込んだ黒髪に、飛び出すのではないかというくらい大きな黒い目、それに比べるとこじんまりとした口と鼻。黒のパーカーと黒のジャージを履いて、靴ではなくサンダル。こんな軽い服装をしているが、軍の士官学校に通っている男である。そのロベルトの後ろにいるのが、エリザベスの親友シェリー・キモトだ。

赤い髪をショートカットにした鳶色の瞳の活動的な少女だ。

ショッキングピンクのTシャツに白いミニスカート、その下に黒のスパッツを履いている。エリザベスの親友とは思えないほど、派手な服装だ。

「ああ、見てるよ。お前そんなこと確かめにわざわざ来たのか？いくら隣のアパートだからって、随分と暇だな？」

とロイが皮肉めいたことを言うと、ロベルトは肩を竦めて、

「まさか。俺もそこまで暇じゃねえよ」

ロベルトはソファにドッカと腰を下ろした。するとシェリーはその隣にスツと座った。

随分仲が良さそうだが、本当はシェリーが酷いやキモチ焼きで、常にロベルトのそばから離れないだけなのだ。

その反対に、エリザベスはまるで伝染病でも移されるとでも思っているかのように、ロベルトから離れて立ち上がった。

「実はさ、おいしい話があるんで、そのことで来たんだ」

とロベルトが言うと、エリザベスがスツとロベルトとロイとの間に入り、

「やめてよ、ロベルト。ロイをおかしなことに巻き込まないで！」

しかし当のロイは別に気にかけもせず、

「どんな話だ？」

「ロイ！」

エリザベスがたしなめるようにロイを睨んだ。すると今度はシェリーが、

「まアまア、エリー。そう目くじら立てなくてもさ」

とエリザベスのスカートの裾を引っ張った。エリザベスはシェリーを睨んで、

「でもシェリー、この二人が一緒に行動すると、何をやらかすかわからないのよ。私達、小学生の頃からいつも酷い目に遭っているじゃないの」

「ま、それはそうなんだけどさア……」

とシェリーは肩を竦めた。エリザベスは呆れ顔になって、

「貴女、ロベルトのことが心配じゃないの？」

「そんなことないって。心配よ、それは」

「だったら……」

そんな二人のやり取りを無視して、ロイとロベルトは話を進めていた。

「実はさ、軍が秘密裏に開発中の新型戦闘機のプロトタイプが、空軍基地にあるらしいんだよ」

「ヘエ」

ロイは半分信じていないので、空返事同然だったが、ロベルトはそれには気づかず、

「そいつに使われているコンピュータがさ、最高水準のものらしいんだ」

「ほオ」

ロイはポテトチップスを食べながら頷いた。ロベルトもポテトチップスを口に運び、

「それを手に入れば、ある筋の連中が、一億は値を付けてくれる

って話なんだ」

「なるほど」

ロイの気のない返事によく気づいたロベルトは、
「おい、真面目に聞けよ。その気がないんなら、話はもうやめだ」
と大声で言った。その声でエリザベスとシェリーが二人の方を見た。
ロイは苦笑いをして、

「悪かったよ。真面目に聞くから、話を続けてくれ」

「ホントだな？」

ロベルトはロイの目を見て尋ねた。ロイはロベルトの目を真っ直ぐ見つめ返して、

「ああ、ホントだ。一億なんて金が手に入れば、もう一生遊んで暮らせるからな」

ロベルトはニヤリとして、

「だろ？」

と得意そうに言った。するとエリザベスが、

「何を企んでいるのよ、ロベルト。危ないことをするのなら、一人でやってよ」

と割って入った。ロベルトはエリザベスを見上げて、

「おいおい、エリー、お前さ、いつも俺を悪役に仕立て上げるけどさ、ホントはロイが先頭に立って悪さしてたんだぜ。いい加減気づいてくれよな」

「そんなことないわよ。いつも誘うのはロベルトじゃないの。ロイは犠牲者だわ」

エリザベスは決して譲らない。ロベルトは肩を竦めて、

「聞く耳持たねえってことかよ。わーったよ」
と言うと立ち上がり、

「ロイ、さっきの話、聞かなかったことにしてくれ。エリーに邪魔されたら、実行は無理だからな」

「おい」

ロイが止めようとしたが、ロベルトはシェリーに目配せして、部

屋を出て行っちゃった。

「もう、短気なんだから、ロベルトは！」

シェリーはエリザベスにウィンクしてロベルトを追って出て行った。

「あのな、エリー、いくら何でも言い過ぎだぞ、あれは」

ロイは立ち上がってエリザベスに言った。しかしそれは少しも非難めいていなかった。エリザベスは口を尖らせて、

「全然言い過ぎなんかじゃないわよ。ロベルトは危なくなると貴方を楯にして逃げていたんだから、たまには反省してもらわないと」

「そうかも知れないけどさ、あいつは俺の親友なんだぜ」

ロイは回転椅子に座り、ポテチの袋をゴミ箱に投げ込んで言った。するとエリザベスは、

「じゃあ、私は貴方の何なのよ？」

とロイに詰め寄った。ロイはビクツとしてエリザベスを見上げ、

「あ、いや、その……」

「私は貴方の召使い？ それとも奴隷？ それともただの知り合い？」

エリザベスは泣き出しそうな顔で叫んだ。ロイは困りきった顔をしていたが、

「お前は俺の恋人だよ。何物にも代え難いな」

と言った。エリザベスはそんな答えをさすがに期待していなかったのか、真っ赤になってしまった。そして、ロイに背を向けると、

「な、何よ、とってつけたようなことを言って！ 全然嬉しくないわ！」

と言いながらも、内心は嬉しいのか、何とも複雑な顔をしていた。ロイはどうしたものかと思案顔になっていた。その時、彼の耳に再びカシェリーナの声が聞こえて来た。

「皆さん、気づいて下さい。そして考えて下さい。今何をなすべきなのかを。私はこのような意味のない戦争が一刻も早く集結することを望んでいます」

ロイはカシエリーナが消えた後も、しばらくディスプレイを見つめていた。

第二章 作戦会議開始

一時の感情でロイのところを飛び出して来てしまったロベルトは、後悔はしていたが、それでも戻ることができるほど恥知らずでもなかった。

「全く、気が短過ぎるよ、ロベルト。戻って謝っちゃいなよ」とシェリーが言うと、ロベルトは、

「うるせえよ。何で俺が謝らなくちゃならねェんだよ。何もわりいことなんかしちゃいねえのによ」

とカリカリしたまま歩を速めた。シェリーは小走りでロベルトを追いかけてながら、

「だってさ、今度の計画は、ロイ抜きじゃ無理なんだろう？ 意地張ってる場合じゃないよ」

「……………」

ロベルトはそれには答えず、歩き続けた。

シェリーは溜息を吐いて、仕方なさそうにロベルトに続いた。

「戻って来ないな」

パソコンの電源を切りながら、ロイは独り言のように言った。

エリザベスはソップを向いたままでソファに座り、ロイの言葉が聞こえているにもかかわらず、何の反応もしなかった。

ロイはそんなエリザベスの様子に溜息を吐いた。そして、

「あのなァ、いつまで怒ってんだよ。いい加減機嫌直せよ」

「何が？」

エリザベスは顔を背けたままで、ムスツとした口調で尋ねた。

「わかった。もうお前とはこれきりだな。あの程度のことですこまで怒るなんて、付き合い切れないからな。俺はロベルトのところに行って来る。ここに戻って来るまでに、出て行くか、今俺と一緒に出て行くか、どっちにするんだ？」

堪りかねたロイがそう切り出すと、さすがにエリザベスはビクツとしてロイを見た。

ロイの目は冗談を言っている目ではなかった。

エリザベスの目が涙で溢れそうになった。

「な、何よ、そんなこと言わないでよ！ 私は何も間違ったことなんて言っていないわ！ どうしてロイがそんなに怒るのか、私、全然わからない！」

とエリザベスは絶叫に近い声で怒鳴った。ロイはそれでも、

「どっちにするんだ？」

と冷静に再度尋ねた。エリザベスは顔を俯かせて、ヒクヒクしゃくり上げながら、

「いやよ、追い出さないでよ。でも、私は悪くないわ、絶対に」

「そんなのはわかってるよ。だから機嫌を直せよ。お前のことは大好きだけど、その癩癩だけはいただけないぞ。その癖、何とかしてくれ」

ロイはエリザベスの顔を覗き込んで言った。

エリザベスは涙と鼻水でグシャグシャの顔を見られたくないのか、顔をさらに俯かせて両手で覆ってしまった。

「お前の言っていることは正しいよ。でも、ロベルトの話を全部聞いてから反論するなり、批判するなりしても良かったと思うんだけどな。あいつだって売り言葉に買い言葉で飛び出しちゃったけど、ホントのところは、後悔してると思うぜ。シェリーはロベルトと会うより前から、お前と親友なんだから、お前と仲違いすれば、絶対シェリーも自分の味方になってくれないってあいつもわかってるからさ」

「……………」

エリザベスはハンカチで涙と鼻水を拭いながら少しだけ顔を上げた。

「美人が台無しだよ、ミス・ハイスクール」

とロイは机の端に飾ってある写真立ての中の写真をエリザベスに見

せた。

そこには、トロフィーを片手に、王冠をかぶって白いガウンをはおった満面の笑顔のエリザベスが、その横でVサインを出しているロイと並んで写っていた。

彼女は今年のカンサイ地区のミス・ハイスクールで優勝しているのだ。彼女は自分の容姿に自信がある。だからこそ、大会にも出たし、優勝も目指した。そして優勝した。

それなのに、ロイはカシェリーナとかいう年上の女の人に「きれいだ」とか私の目の前で平気で口にする。そもそも私が怒りたくなったのは、ロイのせいなのに、どういうわけか、ロベルトに当たってしまつて……。バカみたい。

そんなことを思いめぐらせるうちに、エリザベスは自分がつまらないことにこだわっていたのを恥ずかしく思った。そして意地を張るのをやめることにした。

「もう……」

エリザベスは微笑んでロイを見た。ロイはニヤツとして、

「そうそう、エリーは怒った顔より笑った顔の方が絶対きれいだよ」

「もういいわよ、そんなお世辞は」

エリザベスは恥ずかしいのと照れ臭いので、ロイが顔を近づけているのを押し戻した。ロイはそんなエリザベスの手を握りしめ、

「さっ、ロベルトのところに行こうか」

と話しかけた。エリザベスはロイを見て黙って頷いた。そして二人はドアに近づいた。ロイがドアノブを回そうとしたその瞬間、ドアが開いてシェリーが現れた。

「シェリー？」

ロイとエリザベスはびっくりして彼女を見た。シェリーは苦笑いして、

「ごめんね、エリー。バカを謝らせに引っ張って来たから」
とロベルトを部屋の中に押し込んだ。

「あれ、その顔？」

ロイはロベルトの左頬が赤く腫れているのに気づいたが、それ以上は追求しなかった。ロベルトにも立場というものがある、と思ったからだ。

「いいのよ、私の方が悪いんだから。気にしないで」

とエリザベスが言うのとシェリーは、

「そんなこと言われちゃうとき、このバカを説教した私が無駄な労力使ったみたいで嫌だから、取り敢えず謝らせてよ」

とロベルトを小突きながら言った。ロベルトは不貞腐れた顔で、

「悪かったな、エリー」

とボソボソと言った。シェリーが、

「もっとちゃんと謝りなよ、ロベルト！」

とパシーンと頭を叩いた。ロベルトは痛いな、という顔でシェリーをチラツと見てから、

「申し訳ありませんでした。私が間違っておりました」

と大声で言ってから、頭を下げた。

シェリーはまだその態度に不満があるようだったが、ロイが、

「さっきの話を続けてくれ。作戦会議を開いて、絶対に成功させるんだよ」

と割り込んで言ったので、渋々引き下がった。ロベルトもロイの助け舟にすぐに乗り、

「わかった。綿密な計画は一応立ててみたから、お前の意見を聞かせてくれ」

とポケットから紙切れを取り出し、パソコンデスクの脇のスペースに広げた。そして、

「カンサイの空軍基地は、あのお姉さんの放送でかなり浮き足立っているみたいなんだ。内部の人間の話がある男から入手したんだが」

「何だそれ？ 誰なんだよ、そいつは？」

ロイの問いかけに、ロベルトは言いにくそうにしていたが、

「リノス。リノス・リマウって男だ」

「！」

ロイはその男の名を知っていた。

プロレスラーのような体格の身体に、狡猾そのものの顔が鎮座している、決して背中を見せてはいけないような悪党である。

「ロベルト、そいつはあまりにも危ない情報じゃないか？ リノスは信用ならないぞ」

ロイの言葉を、ロベルトは予測していたようだ。彼はニヤリとして、

「それはわかってるさ。だから、あいつを出し抜いて、もっといい商売相手と交渉しようってわけさ」

「もっといい商売相手？」

堪りかねたエリザベスがまた間に入った。

「もう、ホントにやめてよ、そういうことは」

「いいから先を話してくれ、ロベルト」

「ロイ！」

「まアまア、エリー」

四人の会話は交錯し、話はこじれかけていた。

第三章 反対派の決起

元々、ディズム政権は盤石なものではなかった。

彼のカリスマ性はそれほど高度ではなく、その政治手腕は未知数であったので、多くのスポンサー的存在の財界人は、揃いも揃って日和見主義者ばかりであった。

そんな状態で、カシエリーナの放送があり、何よりも財産が大事な連中は、さっさとディズムに見切りをつけ始めた。

そもそもディズムが軍事産業の巨人であるピュトンの工場を接收したのを見て、財界は色めき立っていた。彼の目指すところは、月の支配、つまり新しい金づるの開発ではなく、只単に月を敵視し、何もかも破壊してしまうことなのだ、と財界人は考えるようになっていた。ディズムの体制は思わぬところからほころび始めていたのだ。

軍の内部も、全て「ディズム総帥万歳！」で統一されているわけではなかった。ディズムの恐ろしさを知っているのは、彼の近くにいる者達ばかりで、遠方の軍事基地の兵士は、ディズムのことを快く思っていない者が多く、その傾向は若くなるほど顕著であった。

ただその意志がまとまらなかったのは、誰もそれを口にしなかったからだ。そんなことを言い出して、自分と同じことを考えている者がほとんどいなくなったら、命が危ないのは自分だからである。

そんな中で、カシエリーナの放送は反ディズムの決起に大いに貢献した。

地球各地で若い兵士達が立ち上がり、軍事基地を次々に制圧し始めたのである。ロベルトがリノスという男から得た情報は、それほど信用できないものではなかったのだ。

たくさんの基地の中には、完全に反対派に占拠されてしまったところもあった。また逆に主戦派（後の軍事評論家はこう呼んだ）が反対派を殲滅し、多くの血を流して終わってしまった基地もあった。

た。

しかし大半の基地は、反対派が主戦派を圧倒し、次々に制圧していた。カシェリーナ達の行動は、こうして結実していったのだ。

「こんな状況をもし月の連中に知られたら、戦局は逆転してしまうかも知れない。セカンドムーンの展開も早まっているという情報も入って来ている。内部で対立している場合ではないのだ」

地球共和国軍カンサイ支部の支部長は、実直で職務に忠実だけが取り柄の男である。彼は軍が分裂し、地球軍が月連邦軍（デイズムの言うところの反乱軍）に敗北することになるのでは、と心配していた。

「確かにそのとおりです。しかしすでに軍の半分近くが造反しているのです。下手に抵抗をして、傷口を広げるようなマネは、どうかと思いますが」

と参謀が答えた。支部長は苛立ったように部屋を歩き回り、

「それだけではない。あのクロノスのプロトタイプを狙っている組織があるという情報も入っているのだ。あれを奪われたりしたら、我々は免職になるくらいではすまんぞ」

「はア………」

支部長は胃に穴が開くのではないかと思うくらい、悩んでいた。ここ何日かで一気に老け込んだような気もする。

ところで、支部長が口に使っていた「クロノス」とは何か？

それこそまさしく、ロベルトがおいしい話があると言っていた、「新型の戦闘機」のことなのである。

もちろんプロトタイプであるから、まだ戦闘には出られないが、搭載されているコンピュータは、人工知能の最先端のものを採用しており、一度戦った敵機や陣営を全て記憶し、作戦を考案して戦闘することができるものなのだ。戦うコンピュータなのである。

そればかりではなく、戦闘実績を積むことにより、進化もするのである。ロベルトが「一億は値を付けてくれる」というのも、強ち

大袈裟ではないのだ。支部長が、それを盗まれたら、と心配するの
も無理はなかった。

「スキュラ作戦とかいう、極秘の作戦が発動したとも聞く。詳細は
まだわからないのか？」

「はア。軍本部でも、極一部の者しか把握していないらしく、情報
は伝わって来ません」

支部長は参謀の答えに眉をひそめて、

「あのカシェリーナ・ダムンとかいう娘の放送がなければ、スキュ
ラ作戦の存在すら知ることはなかった。こんなことでは軍の分裂を
防ぐことなどできん。総帥は一体何を考えておいでなのだ」
と呟いた。

ロイ達はようやくエリザベスを落ち着かせ、会議を再開していた。

ロベルトの作戦は簡単明瞭だった。カンサイ地区の空軍基地に反
対派の部隊が制圧作戦を展開する。その隙に乗じて、新型戦闘機を
奪おうというのだ。

「そんな簡単に事が運ぶのか？ それほどの戦闘機なら、警備も厳
重だろう？」

とロイが尋ねると、ロベルトは、

「基地の人間の一部しかその計画を知らないらしいんだ。だから警
備は手薄。しかも警備している連中も、それがそんなにすごいもの
だとは知らされていないらしいぜ」

「フーン。つけ入る隙はあるらしいな。でもそれにしても、無謀な
気がする」

ロイは慎重になっていた。以前基地に侵入して、たちまち銃殺さ
れた同級生がいるのだ。もちろんロベルトもそのことは知っている
はずなのだ。

「忘れたの、ロベルト？ ギルのことを」

とエリザベスが口を挟んだ。ロベルトはエリザベスを見て、
「忘れちゃいねえよ。だからその辺は慎重に慎重を重ねて、完璧な

作戦を考えてるのさ。でもそれにはどうしてもエリーのダーリンの協力が必要なんだよ」

と言ったので、エリザベスは赤面して、

「ダ、ダーリンなんて、そんな嫌らしい言い方しないで！」

と反論した。ロベルトはニヤリとしてからロイに目を向けて、

「反対派の部隊が正面から戦闘を仕掛ける。新型が格納されている倉庫は、基地の裏手だ。戦闘が激化すれば、警備の人間も加勢に向かうはず。人がほとんどいなくなったのを見計らって、侵入する」

「侵入して奪うまでではないが、その戦闘機をバグに詰めて運び出すわけにはいかないんだろう？ 操縦できるのかよ？」

とロイが言うと、ロベルトは、

「心配するな。リノスが操縦マニュアルのコピーを入手している。それをもらったから、その辺は大丈夫だ」

「そこまでしていて、どうしてリノスは自分でやらないんだ？ あ

いつには命知らずの部下がたくさんいるだろう？」

ロイの反論に、ロベルトは妙に嬉しそうに笑い、

「そこさ。確かにあいつの部下は命知らず揃いだ。でもそれと同時に、バカ揃いなさ。操縦マニュアルを読んでも、リノスを始め誰一人理解できる人間がいなかったんだよ」

とロイの肩をポンポンと叩いた。エリザベスが、

「だからロイがいないとダメなのね。マニュアルに専門用語がたくさん出て来て何の事だかわからないんでしょ」

「そういうことだ」

とロベルトが得意そうに言うと、シェリーがロベルトの頭を小突いて、

「そんなこと言ってるあんたも、チンプンカンプンで、ロイにすぎるしかなかったんでしょ！」

「それをここで言うなよ、シェリー！」

ロベルトはバツが悪そうにシェリーに言い返した。ロイとエリザベスは顔を見合わせて笑った。

「ま、つまり、お前抜きじゃ無理だつてことさ。頼めるか？」

とロベルトは神妙な顔で言った。ロイはニツと笑って、

「作戦の内容はともかく、リノス・リマウを出し抜けるかも知れないってわかったら、俄然やる気が出て来たよ。いつ決行なんだ？」

ロベルトはロイの返答と問いにフツと笑って、

「明日の午前5時。反対派の部隊が午前4時頃に戦闘を開始するんだ。それが激しくなつて来た頃合いを見て、裏から突入して、戦闘機を奪う」

「了解だ。しかし5時かア。起きられるかな？」

ロイの心配にロベルトはやや呆れ気味に、

「その前に眠れねェよ。興奮しちまってさ」

「かもな」

二人は顔を見合わせて大笑いした。エリザベスが、

「本気なの、二人共？ ギルと同じ目に遭うかも知れないのよ？」

と涙ぐんで言うのと、ロイが、

「大丈夫だよ。ギルは酔っぱらって侵入して、軍人の制止も聞かずにそのまま進んで銃で撃たれたんだ。俺達はそんなことはしないよ」

「全く、楽天的なんだから！」

エリザベスはプイと顔を背けた。ロイはロベルトの顔を見て肩を竦めた。

第四章 急転の時

夕方になった。カンサイ支部には、ネオモント墜落の情報が入っていた。

「一体どこに落ちるのだ？」

と支部長は参謀に尋ねた。参謀は、

「只今計算中です。ニホンではないようですが……」

「ニホンかどうかなど、関係ない！ あんなものが地球に衝突したら、それがどこであろうと、只ではすまないのわかりきったことではないか！」

と支部長は怒鳴った。

「それはそうなのですが……」

参謀は、私に怒鳴っても仕方がないだろう、という顔で言った。彼とてそんなことはわかっているのだ。

一方ロイ達は、ネオモントが地球に向かって落下中だという軍内部の情報をインターネットの裏サイトと呼ばれている、限られたネットユーザーのみにしか知られていない極秘サイトで知った。

「月の連中、とんでもねエことを考えやがるな。あんなものを地球に落とされたら、大変なことになるぜ」

とロベルトがディスプレイを覗き込んで言うと、ロイはキーボードを叩きながら、

「そうだな。計算してみたら、あと15分で地表に到達する。その時起こる衝撃は、マグニチュードで換算すると……」

と言いかけたが、

「ダメだ、計測不能だ。あれほどの規模の隕石の衝突は、地球の歴史にない。どうなるかわからないな」

「ええっ？」

ロベルトとシェリーが異口同音に叫んだ。エリザベスはロイの肩

にしがみついて震えている。ロイはそのエリザベスの手を優しく握りしめ、

「大丈夫。お前は俺が守る。何があってもな」

「ロイ……」

エリザベスはその言葉に感激し、ロイの頬にキスした。ロベルトとシェリーも抱き合い、互いに頬にキスしていた。

「畜生、こんなことで終わっちゃうのかよ、俺らの人生はよ！」

ロベルトが叫んだ。四人はほぼ同時に窓に歩み寄り、見えるはずもないネオモントを見つけ出そうと、空を眺めた。

その空は、非常なほど青く澄んでいた。

「あれ、何かしら？」

エリザベスが上空を指差して、誰にともなく言った。

ロイとロベルト、そしてシェリーが、その指差す方を見た。

そこには、一条の光が走っていた。その光は強烈なものだった。

「何だ、あれ？」

ロイが呟いた。ロベルトは首を傾げ、シェリーは眉をひそめた。

「まさか……」

ロイは恐ろしい事実に思い当たった。ロイの思った通り、それは地球軍の秘密兵器である核融合砲の光であった。

「何だよ？」

ロイの言葉にロベルトが反応した。その時、光が消え、次の瞬間、はるか彼方の宇宙空間で凄まじい爆発が起こった。その爆発は閃光となり、ロイ達の視覚にも捉えられた。

「あの閃光は……」

ロイは慌ててパソコンに向かい、サイトを検索した。しかし、情報は交錯しているようで、何も得られなかった。

「軍も大混乱しているみたいだな。何もわからないらしいぜ」

ロベルトは携帯無線を調整しながら言った。ロイはパソコンから顔を上げて、

「あの光、もしかしてカシェリーナさんが言っていた、核融合砲じ

やないか？」

「まさか……。もう完成したのか？　いくら何でも早過ぎるぞ」

ロベルトはビクツとして言った。ロイは、

「確かに早過ぎるよな。でも他に可能性は考えられないし。今のは核融合砲でセカンドムーンを撃つたことによる爆発の輝きじゃないのかな。情報が少な過ぎて確かなことはわからないけどさ」

「もしそれが事実なら、月はセカンドムーンを失ったことになるから、敗北は決定的だぜ」

ロベルトは上空を見上げて言った。ロイも空に目をやり、

「だな。セカンドムーンがなくなったとなれば、月は攻撃力を半減させられた事になるからな。そして、次に核融合砲が狙うのは、コペルニクスクレータだろう」

「ああ」

ロベルトは気が滅入ったような声で応えた。エリザベスとシェリーは引きつった顔で互いを見合った。

「戦争、終わるのかな？」

シェリーが言った。するとロベルトは肩を竦めて、

「そいつはわかんねえな。ディズムが何を考えてあんな破壊兵器を造ったのか、全く想像がつかないからな。終わるどころか、これから本格的に始まるんじゃないかな。月の人間は、もう逃げ出す準備をしているかもよ。どこに逃げればいいのか、わからねエけどよ」

「……」

シェリーは溜息を吐いた。ロイはエリザベスがほとんど動かなくなっているのに気づき、

「そんなに緊張しなくても平気だよ。言い方は悪いかも知れないが、セカンドムーンは墜落しないで消滅したんだからさ」

と言った。するとエリザベスは半泣きの顔で、

「でもそれは確かなことじゃないでしょ？」

「そりゃそうだけどさ。計算じゃ、もう地表に落下している時刻だ。未だにそれらしき兆候がないのは、爆発して消滅したと考えるのが

妥当だと思うよ」

ロイの言葉にロベルトが同意した。

「ロイの言う通りだ。もし爆発していないのなら、何かが起こって
もいい頃だ。何もないのは、やっぱり爆発したってことだろ？」

「それならいいんだけどね」

シェリーが言うと、エリザベスは悲しそうな顔で、

「月の人達、どうなっちゃうのかしら？ ディズム総帥は、月を滅
ぼすつもりなのかしら？」

とロイを見て尋ねた。ロイは腕組みをして、

「そこまでやるかどうかはわからないな。でも可能性は否定できな
い」

「酷い。酷過ぎるわ。どうしてそんなことを考えつくの、人間は？」

エリザベスが涙声で叫び、顔を俯かせた。ロベルトが、

「月の連中の逃げ場があるとしたら、裏側だよな」

と言った。その言葉にエリザベスはピクンと顔を上げた。

「ねえ、もしかして、クロノスって月を殲滅するための最終兵器な
のかしら？」

エリザベスの言葉に、ロイもロベルトもシェリーも、ギョツとし
た。

「核融合砲で叩けるのは、月の表側だけだ。裏側を叩くには、月ま
で行く必要があるからな」

ロイが付け加えた。ロベルトとシェリーはハッとした。

月は自転周期と公転周期がほぼ同じため、裏側の大半を地球側に
向ける事がない。月が裏側にも基地や居住施設を保有していると
なると、核融合砲ではそこを叩く事ができない。

「クロノスは一機で戦艦並みの破壊力を持つ事になるらしい。そん
なものに量産されたら、大変なことになるぜ」

ロベルトが口にした。ロイは、

「全く、人間て奴は、途方もない事を考える生き物だよな」
と独り言のように言った。するとロベルトは、

「だからこそ、俺はクロノスを軍から盗み出して、それを阻止したいんだ」

と真顔で言った。シェリーが呆れ顔で、

「嘘言わないの。あんなに、金、金って言ってたあんたが、そんなこと思ってるわけがないよ」

「ハハハ、バレたか」

ロベルトは頭を掻いた。ロイとエリザベスは、呆れて顔を見合わせた。

第五章 決断

カンサイ支部にネオモント消滅の情報が入ったのは、核融合砲が発射されてから30分後のことであつた。

「セカンドムーンが墜落するのを阻止できたのはいいがな……。これからどうなるというのだ？」

と支部長は、ニュートウキョウの軍本部からのメールを見ながら呟いた。

「核融合砲によるセカンドムーンの破壊は戦局を一変させた。しかし、反政府ゲリラの連中の闘志をかき立てる事にもなろう。総帥はどうなさるつもりなのか……」

支部長はメールが印刷された紙をシュレッダーに放り込んで言った。

「力で押さえつける事ばかりでは、解決できない事もある。それがわからない者は、最終的には滅びるはずだ……」

支部長は椅子に身を沈めて目を閉じた。

「無神論者の私が、神に祈りたくなるとはな……」
と彼は言つて、フツと自嘲気味に笑つた。

夜になった。

ロイはロベルト達とハンバーガーをかじりながら、ディズムの月への警告の放送を見ていた。

敗北が必至となった月には、ディズムのどんな提言も呑むしか道はないように思われた。

「本当かな？」

とロベルトが言つた。ロイはハンバーガーを頬張りながら、

「何が？」

「月を滅ぼすつもりはないっていう、ディズムの言葉さ」

「そんなわけないよ。あのオッサンなら、本気で月を二つに割るま

で攻撃しかねないよ」

「だよなア。あり得ねえよな」

ロベルトはハンバーガーをコーラで流し込んで頷いた。

「なア、ロベルト」

「何だ、かしこまって？」

ロベルトはロイの声のトーンとその真剣な顔つきから、何か嫌な予感を覚えたが、それでも尋ねてみた。

「クロノス、本当に戦争阻止のために奪わないか？　俺さ、何だかそうしないといけない気がして来たよ」

「おいおい、お前まであのお姉さんの信者かよ？」

ロベルトの言葉に、エリザベスがキツとしてロイを睨んだ。ロイはエリザベスの視線に気づいて、

「違うよ。そうじゃない。確かに彼女の話に影響はされたけど、彼女の言った事だけでそう考えたわけじゃないよ」と二人に対して説明した。

エリザベスは睨むのをやめたが、ロベルトは納得しかねていた。

「リノス・リマウくらいだったら、騙したって大した事はないけど、俺が本当に取引するつもり奴は、あんなゴロツキとは違う、本物のヤバイ系なんだ。それはできねエよ。絶対殺されるぞ」

ロベルトの真顔は、久しぶりだな、とロイは思いながら、

「そいつにクロノスを渡したら、今度はそいつがディズムに成り代わって、地球を支配しようとするんじゃないのか？」

ロベルトはロイの言葉にグツと詰まったが、

「かも知れねエけどさア。危な過ぎなんだよ。やめといた方がいい。俺達には、そこまでする理由も必要も、義理もねエしな」

と反論した。ロイはロベルトの考えに同意できなかったが、命の危険がある事は事実なので、それ以上強く迫れなかった。するとシェリーが、

「何言ってるのよ？　クロノスをそんなバカに渡したら、今以上に危ない事になるかも知れないんだよ。そんなこともわからないほど、

あんたってバカだったの？」

と怒鳴った。ロベルトはムツとしてシェリーを見て、

「バカだと？　どうして俺がバカなんだよ？」

と怒鳴り返した。シェリーはそれよりも大きな声で、

「バカだからバカって言ったんだよ。それともあんた、自分の事、バカじゃないとも思ってるの？」

「何だと？」

「よせよ！」

ロイがロベルトを止め、エリザベスがシェリーを止めた。

「よしなさいよ、シェリー。貴女達がいがみ合ってどうするのよ」

「……」

ロベルトとシェリーは落ち着いたように見えたが、目は互いを睨んだままだ。

エリザベスが、

「ロイ、貴方の今の考えには、私、大賛成よ。反戦のためなら、協力するわ。ね、シェリー？」

とシェリーを見た。シェリーはエリザベスのあまりにも真っ直ぐな瞳を眩しそうに見て、

「そ、そうね。いいかも」

と同意した。ロベルトはムスツとしたままだったが、

「知らねエぞ、ホントによ」

「命を狙われたって、月を滅ぼすために造った戦闘機に乗ってれば、そんなバカ怖くないって、ロベルト」

シェリーのお気楽発言に、ロベルトは呆れ顔で彼女を見た。

「お前なア……」

「よし、決まりだな。そうしよう、ロベルト」

とロイが畳みかけるように言った。ロベルトはついに降参したと両手を上げて、

「はいはい、わかりましたよ」

と渋々同意した。

同じニホン列島のトウホク地区に、ロベルトの表向きの取引相手のリノス・リマウはいた。

「カシェリーナ・ダムンという女の放送がいきっかけになった。事は予定より早く運びそうだな」

リノスはその巨体を揺らして、メールをプリントした紙を机の上に投げ出し、回転椅子を軋ませて座った。

彼は、現体制、すなわち、ディズムによる軍事独裁政権を武力によつて倒そうと考えている、自称革命家である。

しかし彼の率いる部隊は、ロベルトが言ったように「命知らず揃い」だが、「バカ揃い」で、どう見ても山賊か夜盗の集団にしか見えなかった。

「さてと。ロベルト、うまくやれよ。お前の友達のコンピュータの知識が頼りなんだからな」

とリノスはニヤリとして呟いた。

リノスの野望は、ディズムを倒して共和制を復活させる事ではなく、無政府状態を作り出し、自分達の好き勝手に生きられる時代にする事だ。革命家とは全然違う。いや、多くの革命家と称する者達は、リノスと同じなのかも知れない。

「評議会の連中も気に食わなかったが、ディズムのヤロウはもつと気に食わねえ。この手で叩き殺してやりたいくらいだ」

リノスは右の拳をギュッと握りしめた。

彼には、ディズムを怨む理由が二つある。

一つは、彼が資金源としていた油田を取り上げられた事だ。ニホン列島は資源の少ない島だが、リノスは油田を掘り当て、闇ルートで大儲けしていた。時代遅れの石油だが、ブラックマーケットではそれなりの商品価値があり、高値がついたのだ。ところがディズムが政権を奪取すると、途端にリノスの油田は、強制徴収されてしまった。それでリノスは酷くディズムを怨んでいる。

そしてもう一つは、軍がリノスが儲けで買った土地を接收し、基

地にしてしまった事だ。リノスは私怨を晴らすために、革命を起こすと息巻いている、どうしようもなく身勝手な男である。

いよいよ決行の時間が近づいて来ると、ロイとロベルトは落ち着かなくなっていた。エリザベスとシェリーは、隣の寝室で二人で同じベッドに寝ていたが、ロイとロベルトは、さすがに眠くならなかった。

「しくじれば、死ぬかもな」

ロイが独り言のように言った。ロベルトは、

「あんまりそういうことは考えないようにしようや。気が滅入るだけだ」

「そうだな」

ロイはロベルトと顔を見合わせて、ニッと笑った。

「死ぬなよ、ロイ」

「お前こそな、ロベルト」

二人はガツチリと握手を交わし、立ち上がった。

「眠れなくても、一応横になった方がいい。少しは気が休まるしな」とロベルトが提案した。ロイは頷き、

「そうだな」

と応じた。

第六章 早朝の決戦

まだカンサイ地区は朝焼けすら現れていない時間。
共和国軍カンサイ支部の周辺に、ジワリジワリと動くモノがあった。

ディズム体制に反対する者達の、襲撃部隊である。

彼らは軽機関銃とわずかな数の手榴弾を腰に下げ、静かに基地を取り囲んで行った。

そんな反対派の動きのさらに外側で、ロイとロベルトは待機していた。

「まだ始まらねエな。早くしてくれねエかなア」

とロベルトは欠伸をしながら呟いた。そのすぐ隣で基地を眺めていたロイは、

「仕方ないさ。彼らも慎重なんだよ。恐らく、彼らだってクロノスの情報は掴んでいるはずだ。他の基地とは違うって、覚悟を決めているんだよ」

と応じた。ロベルトは、

「にしてもさ、どうしてついて来たんだよ、お前ら？」

と後ろにいるシェリーとエリザベスに言った。シェリーは憤然として、

「あんたね、お前達を危ない目に遭わせたくない、とか言ってさ、あんた達に何かあったらさ、別行動とってる私達が真っ先に確保されるの、わかってるんでしょ？」

「そりゃ、そうかも知れねエけどよ」

ロベルトが言葉を濁すと、シェリーはさらに、

「それがわかってて、私達が寝ている間に出て行こうとするって、どういうことよ？」

と怒鳴った。ロベルトは慌てて、

「声がでかいよ！ 基地に気づかれたらどうするんだよ！」

とシェリーの口を塞いだ。エリザベスはロイを見て、

「私は、貴方のそばにいたいわ。離れていたら、もう二度と会えないような気がするの」

「エリー……」

ロイはエリザベスの髪を右手で撫で下ろした。

「おい、動いたみてエだ」

とロベルトが声をかけた。ロイはエリザベスの頬に軽くキスをしてから、

「どこだ？」

「あれだ。かすかに光が動いてるだろ？ 基地の鉄条網に近づいてるようだぜ」

とロベルトはナイトスコープをロイに差し出した。ロイはそれで目標を確認した。

「五人ほど先発したようだな。大型のカッターを持ってる。鉄条網をねじ切るつもりか」

「そのようだな。でも、警報が鳴るぜ、そんなことすると。ま、俺達にはその方が好都合だけどな」

とロベルトはナイトスコープをポケットにしまってニヤリとした。

やがてロベルトの警告通り、鉄条網が破られる事によって警報が鳴り響いた。

「敵襲だど？」

と支部長は軍服の襟を留めながら言った。

「はっ。反乱軍です」

参謀が支部長を早足で追いかけてながら答えた。二人は司令室に到着した。

「すぐに迎撃体制を整えろ」

「はっ！」

支部長は司令席に座り、インカムを着けた。

「連中の狙いはクロノスだ。クロノスに近づかせるな。必ず撃退し

ろ」

「敵、数およそ六十」

索敵係の答えに、支部長はムツとした。

「六十、だと？　ここも随分と舐められたものだな」

彼は舌打ちをし、椅子を軋ませた。

「全火力を総動員し、敵を殲滅せよ」

重火器で反撃を開始したカンサイ支部の部隊は、圧倒的な差で反対派の部隊を押し戻し始めた。

戦車の砲弾や、バズーカの攻撃で、襲撃部隊はたちまち基地の外へと追いやられてしまった。

「おいおい、早過ぎるぜ。もう負けちゃったのかよ？」

その様子を見ていたロベルトが呟いた。しかしロイは、

「いや、妙だ。押し返されてはいたが、それにしてもあまりにあっさり引いたぞ。何かある」

「そうか？」

ロベルトはロイの言葉を鼻で笑ったが、次の瞬間、それが大当たりのだったと気づいた。勢いに任せて、逃げる襲撃部隊を追いかけた戦車や装甲車が、基地外のある場所まで行くと、突然視界から消えたのだ。

「トラップか？」

ロベルトがロイを見た。ロイは頷き、

「ああ。恐らく落とし穴だ。連中がここに来てから動き出すまでがあまりに長かったんだよ。絶対何か仕掛けていると思ったのさ」

「それであいづら、軽装備だったのか。なるほどな」

ロベルトは愉快そうに笑い、

「じゃあ、そろそろ行くか」

「ああ」

ロイはエリザベスに別れのキスをしようと彼女を見た。するとエリザベスとシェリーは、先に突入に使うためにロベルトが調達して来たカートの後部座席に乗り込んでいた。

「お、おい……」

ロイとロベルトは異口同音にシェリーとエリザベスに言った。

「何してるの、早くしなさいよ。あの連中がもう一度基地に戻って来る前に、横からかすめ取る以外、私達にチャンスはないんだよ」とシェリーが言った。ロベルトは、

「かも知れねエな」

と運転席に飛び乗った。ロイもエリザベスに何か言おうとしたが、肩を竦めて助手席に乗り込んだ。

支部長の元に、戦車と装甲車数台が、反乱軍の罠で落とし穴に落ちたと報告が入った。

「何をしているのだ？ 深追いをするなど、軍事の初心者のすることだ。この基地には、そんな間抜け共しかないのか！」

彼は苛立っていた。

罠にかかった先発隊を助けに行った部隊まで返り討ちに遭い、部隊は四分五裂状態だ。

数六十の反乱軍に、総勢五千のカンサイ支部が翻弄されているのだ。

その頃、リノスも自家用ヘリに乗り込み、ニュートウキョウを目指していた。

ロベルト達と落ち合うのは、ニュートウキョウ郊外の、チョーフにある元飛行場であった。

「あと半日もすれば、俺が地球の支配者だ。ディズムめ、目にもの見せてやる」

とリノスは目をギラつかせて呟いた。

正規軍の半数を叩いた襲撃部隊は、勢力を盛り返し、一気に基地内に突入した。

激しい銃撃戦と砲撃戦が始まった。

そんな戦いの行われているほぼ反対側から、ロイ達の乗るカートは鉄条網に接近していた。

「警報大丈夫なの？」

「もう平気だよ。あれだけドンパチやってれば、もう仮に鳴ったって聞こえはしないさ」

エリザベスの素朴な疑問にロイが答えた。

「ここから先は俺達だけで行く。ここで待ってろ」

とロベルトが言うと、シェリーは、

「冗談じゃないわよ。こんな危ないところにいられるわけないでしょ

！ 一緒に行くよ」

「おい」

「うるさい！」

シェリーの一喝にロベルトとロイはビクツとした。

戦いが一向に終わらないのを憂えた支部長は、奇策に出る事にした。

「実戦配備はまだ危険だが、クロノスを出し、一気に反撃に転じるしかない」

と支部長が言うと、参謀も、

「そうですね。それしか道はないと思います」

「すぐに準備に取りかかれ」

「はっ！」

支部長は立ち上がって各所から送信されて来る被害状況に耳を傾けた。

「間に合うのか……？」

と彼は誰にともなく言った。

第七章 突入

ロイ達は、戦闘の反対側で、こつそりと鉄条網を破り、基地内に侵入していた。

「大丈夫、シェリー？」

ハイヒールが歩きにくそうなシェリーをエリザベスが気遣った。シェリーは苦笑いして、

「平気、平気。心配しないで、エリー」

と作り笑いをして言ったが、本当は今すぐにでもハイヒールを投げ捨てたい気分だった。それに気づいたロベルトが、

「おい、足手まといになるなら、置いて行くぞ」

と冷たい事を言い放った。するとシェリーはハイヒールでロベルトをポカンと殴りつけ、

「ふざけんじゃないわよ！」

「ってえなっ！」

ロベルトは涙目で言い返した。シェリーはヒールを両足ともボキッとはし折ってしまい、踵のないハイヒールを履き直した。

「これで何にも問題なくなったよ。サッサと行くよ」

シェリーは先頭に立って歩き出した。ロイとエリザベスは顔を見合わせてそれに続いたが、

「おい、待てよ。危ねエぞ」

とロベルトはシェリーを押しつけて一番前に出た。

「おや、こっちに走って来る車があるぞ」

ロイが前方を指差して言った。ロベルトもそちらに目をやり、

「ホントだ。何だ、あいつら？」

走って来るのは、軍用車両で、ホロの掛かっていない四駆車だった。四人の兵士が乗り込んでいるのが見えた。

「もしかして、目的地は俺らと一緒に奴か？」

ロイが呟いた。ロベルトがギョツとして、

「作戦変更で、クロノス発進なんじゃねエか？　まずいぞ」

「そういうことか」

ロイは肩にかけていたリュックサックを下ろし、中から何かを取り出した。

「何だ、それ？」

ロベルトが尋ねた。ロイはニツとして、

「ロケット花火だよ。連中に見舞ってやるのさ」

「なるほど」

ロイがポケットからライターを取り出したのを見て、エリザベスが、

「ロイ、貴方、また煙草吸ってるのね？」

と大声を上げた。ロイはうるさそうにエリザベスを見て、

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

「だって……」

ロイはエリザベスを無視して、花火と一緒に持って来ていた缶ビールの空き缶に指し、点火した。

「ああっ、ビールまで飲んでるの？」

「もういい加減にしてくれ、エリー！」

火を点けられた花火は、勢い良く飛び立ち、四駆車に向かった。

「何？」

「敵襲か？」

いきなり前方から、火の塊のようなものが飛来したので、四駆車に乗り込んでいる兵士達は、肝を潰した。

「う、うわっ！」

運転していた兵士がロケット花火をかわそうとして急ハンドルを切ったため、四駆車はクルンと横に一回転して、後ろ向きに近くのバリケードに突っ込んでしまった。

「よし、やった、今だ！」

ロイ達はすぐさま格納庫に走った。

「あれだ、あれ。あの中にクロノスがあるんだ」

と走りながらロベルトが指し示したのは、何棟か並んでいる格納庫のうち、真ん中のものだった。

「さっきの車が走り出したよ」

とシェリーが大声で言った。ロイは、

「もう一発見舞ってやる！」

とロケット花火を10本ほど束にしたものに点火した。今度は本当にロケットランチャーに見間違えるような勢いで、花火が四駆車に飛んで行った。

「わーっ！」

またしても四駆車はバランスを失い、今度は縦にゴロンと回り、腹を出してしまった。

「よし、成功だ」

とロイが言うと、ロベルトが、

「おい、ロイ、ここは電子ロックなんだ。頼むぜ」

「了解」

ロイはリュックサックからパソコンを取り出し、コードをロックとつないでキーボードを超高速で叩き出した。

「あっ、あいつら走って来るよ。やばいよ！」

とシェリーが金切り声を上げた。エリザベスはロイに、

「大丈夫、ロイ？」

「ああ。余裕だよ」

ピーッという信号音がして、ロックが解除され、鉄の大きな扉が開いた。その様子を走りながら見ていた兵士の一人が、

「バカな、電子ロックを破りやがったぞ。あいつらガキだろ？ どうなってるんだよ？」

「最近のガキはあなどれないぞ」

と別の一人が言った。四人は顔を見合わせて、走る速度を上げた。

「来るぞ！」

「平気だよ」

ロイはエリザベスを最後に扉の中に引き込むと、ガシャーンと扉

を閉じた。

「くそっ！」

四人の兵士は、ほんのタッチの差で閉め出されてしまった。

「司令部に連絡しろ。クロノスの格納庫に、四人のガキが侵入したと。戦力の大半をこちらに回して、クロノス奪取を阻止されたしと！」

「はい」

一番の下っ端らしき男が、無線に必死に叫んでいた。

格納庫の中は真っ暗だった。窓がないのだ。

「ほいよ」

とロベルトがサーチライトを点灯させた。

そのライトの明かりの中に浮かび上がったのは、漆黒の巨大な戦闘機だった。

それは戦闘機と呼ぶには、あまりにも巨大で、むしろ小型の駆逐艦といったサイズのものであった。スキュラと呼ばれる特攻機が、やはり小型艦クラスの大きさであったが、クロノスはそれより大きかった。

「こんなものが、空を飛ぶのかよ。船だぜ、まるで」

とロイは溜息混じりに呟いた。

エリザベスとシェリーは、その異様な形の戦闘機を見て、言葉を失っていた。

「こんなものが空を飛んで月まで行ったら、間違いなく月は、昔の姿に戻っちまうな」

とロベルトが言った。シェリーがやっと、

「ホント。つくづく、人間て恐ろしい生き物だよね」

と声に出した。エリザベスもジッとクロノスを眺めていたが、

「そうね」

とだけ言った。ロイは、

「さてと。こいつを動かしてここから脱出だ。多分今頃、この格納

庫は軍に取り囲まれているだろうからな」

「そ、そうだな」

とロベルトはロイを見た。シェリーとエリザベスは顔を見合わせて頷いた。ロベルトがリュックサックから操縦マニュアルを取り出して、ロイに渡した。ロイはそれをパラパラとめくり、

「ここが入り口のようだ」

と大きなレバーを引いた。するとエアロックが開き、中が見えた。

「さっ、乗り込むぞ」

ロイが先頭で中に入った。続いてエリザベス、シェリー、そしてロベルトが後ろ向きに入り、エアロックは閉じた。

第八章 クロノス発進

支部長は、クロノスの格納庫に四人の子供達が侵入したことを告げられ、仰天していた。

「バカな。クロノスの格納庫の電子ロックを解除して、中に入られただど？ 信じられん」

「しかし、現に、高校生くらいの男女四人が、格納庫の中にいます。内部の監視カメラの映像の一部ですが、この後彼らに映像をシャットダウンさせられてしまいました」

と参謀が渡したのは、非常に解像度の悪い監視カメラの映像の一部のプリントであった。支部長はそれを受け取って凝視し、

「こんなものでは、一体どこの誰が侵入者なのかわからんではないか。反乱軍との戦闘より、クロノスの死守だ。戦力の半分をそちらに回せ。もしそいつらが、反乱軍の別働隊だとすると、ますますことは厄介になるぞ」

「はい」

支部長は、頭が割れるかと思うくらい、ズキズキして来た。

「どうして私のところにあんなものが回って来てしまったのだ？」

彼は知らなかったのだが、クロノスがカンサイ支部に任されたのにはワケがあった。

この支部長の生真面目さだ。欲に駆られた連中では、良からぬ事を企むと考えた軍上層部が、彼の支部を選択したのである。

つまり、原因は自分自身にあったということなのだ。何とも気の毒な話ではあるが。

ロイ達はクロノスの中で悪戦苦闘していた。

「何とか明かりは点いたが、こりゃ、思った以上に厄介なものみたいだぜ、ロベルト」

ロイは、居並ぶ計器類に溜息を吐いた。ロベルトも中を見回して、

「確かに。どこから手をつけていいのか、見当がつかねえな」

「ちよっと、どうするのよ、ロベルト？」

シェリーがロベルトを突ついた。ロベルトは彼女を見て、

「ロイにすぎるしかねえよ。俺には何もできねえ」

「全く、情けないね、あんたは」

シェリーは肩を竦めてエリザベスと顔を見合わせた。するとロイが、

「ありゃ、これは……」

「どうした？」

ロイの声に三人が一斉に彼を見た。ロイは三人を見て、

「このマニュアル、解説の部分にダミーがある。全部読まないで、どこが本当の解説なのか、わからないようになっていよ。大丈夫だ、よく読めば、絶対に動かせる」

「そうか、良かった」

ロベルトがホッとした時、格納庫の外が騒がしくなって来た。

「何だ、一体？」

「外部モニターはこれだな」

とロイがパネルを操作した。何もなかった真っ黒な部分が、パッと光り、外の映像が映った。

「へえ、ここにスクリーンがあったのか。すげえな、ホントに」

とロベルトが言うのと、エリザベスが、

「ねえ、格納庫の外で凄い音がしてるわよ。ここに突入しようとしているんじゃないの？」

ロイはマニュアルを食い入るように読んでいたが、

「そう慌てるなって。簡単に破られたりしないよ。電子ロックが使われてる格納庫が、そんなに貧弱なわけないだろ」

と言っただけで、全く急ぐ様子がない。

「ちよっと、ロイ、少しは急いでよ。尋常な音じゃないのよ！」

エリザベスは少し震えながらロイの肩を揺すった。

「心配いらないよ」

とロイが言った時、ついに扉が破られ、特殊な黒いスーツに身を包んだ部隊が格納庫になだれ込んで来た。

「おい、もう破られちゃったぞ、ロイ！　まだか？」

気ぜわしく外とロイを互い違いに見ていたロベルトが叫んだ。

「あれ、もう入って来たのか？　意外に早かったな」

ロイはそれでも全然焦っていない。シェリーまでが、

「ロイ、いい加減にしてよ。いくら何でも、余裕かまし過ぎだよ、あんた」

と怒鳴った。ロイはニヤリとして、

「はいはい。慌てなくてもいいって言ってるのになア。俺達は軍の秘密兵器に乗ってるんだぜ。こんな安全な場所はないんだよ」

「そりゃそうかも知れないけど。中に入って来られたら、私達引きずり出されちゃうんじゃないの？」

とエリザベスが心配そうに尋ねた。ロイは、

「それは大丈夫だよ。クロノスには個体認識装置が付いているんだ。さっき俺達の指紋と声紋と網膜の毛細血管と掌の静脈を記録した。

だから、クロノスは俺達4人以外を全員敵と看做すから、あの突入して来た連中、これから大変な目に遭うぞ」

「ええっ？」

エリザベスとシェリーはびっくりして外を見た。ロベルトが、

「そうか、そこまで解読したのか。さっすが、ロイだ」

「まアな」

ロイは少々照れ気味に応じた。

格納庫に突入して来たのは、カンサイ支部の特殊部隊の精鋭だったが、クロノスの秘密を全て知っているわけではなかった。

「迂闊に近づくな。こいつはプロトタイプとは言え、軍の最高機密なんだ。どんな反撃があるかわからんぞ」

と部隊の隊長が隊員に言った。隊員の一人が、

「しかし、搭乗しているのは子供だと聞いています。クロノスはまだ始動していないのではないですか？」

「いや、もう始動してしまっている。ナイトスコープみたいなものが、こつちを監視しているのが見える。これ以上近づくのは、危険だ」

「そんな。どうするんですか？」

隊長は思案していたが、

「とにかく、遠巻きにして連中の出方を見守るしかない。奪還のチャンスは必ずあるはずだ」と答えた。

「メインエンジン始動。動かすぜ」

とロイが操縦席に座り、ロベルトがその隣に座った。エリザベスとシェリーは、他の空いている席に座った。ロイは二人の女の子を見て、

「シートベルトはきちんとしとけよ。どんな脱出方法になるか、わからないからな」

「ええ」

シェリーとエリザベスは、真剣な表情で応えた。

「動き出したぞ」

「回避！」

精鋭部隊は、格納庫から出た。クロノスはゆっくりと前進し、格納庫の扉をいとも簡単に破壊し、そのまま外に出た。

「ふエーッ、連中があれほど苦労してぶち破った扉を、ドスンとぶつかっただけで、あっさり壊しちまったぜ。すげえ」

ひしゃげて倒れてしまった扉を見て、ロベルトが感嘆の声を上げた。

「こいつは想像以上の頑丈な奴だな」

とロイは呟いた。そして、

「このまま滑走路に向かうぞ。脱出だ」

「ああ」

ロイとロベルトは、インカムを着け、前を睥んだ。シェリーとエリザベスは、手を握り合って互いを見た。

「こ、これがクロノスか？」

隊長はあまりに異様な戦闘機の形を日の光の下で見て、仰天していた。

「ボディーは重装甲だ。どんな火器も受け付けはしない。しかし、足は違う。ただのゴムのタイヤだ。あれを狙え！」

精鋭部隊の火器の攻撃が、クロノスのタイヤに集中した。

「お、おい、ロイ、大丈夫か？」

とロベルトが動揺して尋ねた。ロイも、

「ちょっとだけやばいかもな。タイヤだけは普通のゴムみたいだ。撃たれたら、パンクしちゃう」

「ええっ？ どうするのよ？」

とシェリーが大声を上げた。ロベルトは、

「とにかく、急いで脱出だ。それしかない」

「そうだな」

ロイはクロノスの前進スピードを上げた。

「逃がすな！ 早くタイヤを撃ち抜くんだ！」

精鋭部隊の攻撃がタイヤを狙い撃ちしている。ロイは巧みにそれをかわしていたが、やがてタイヤのうち2本が撃ち抜かれ、クロノスは方向が定まらない動きになってしまった。

「くそっ、これまでか？」

とロベルトが歯ぎしりした。もう1本のタイヤも撃ち抜かれ、ついにクロノスは停止してしまった。精鋭部隊は、それを確認すると、ジワジワとクロノスに近づいて来た。もちろん、警戒は怠っていなかった。

「ど、とうなっちゃうの、私達？」

シェリーが震えてエリザベスに尋ねた。エリザベスは、

「大丈夫よ、シェリー。二人が必ず何とかしてくれるわ」と答えた。

第九章 ニュートウキョウへ

スクリーンに映る精鋭部隊は、次第にその輪郭をはっきりさせ、クロノスまであと数メートルのところまで近づいていた。

「どうするのよ？」

シェリーが大声で言った。

ロベルトはイライラして髪を掻きむしった。

ロイはジッとスクリーンを睨んでいるが、何も言わない。

エリザベスはそんなロイを心配そうに見ていたが、彼が全く言っていないほど慌てていないのに気づき、

「ロイ、何かあるの？ 貴方、全然焦っていないわ」

と尋ねた。その言葉にロベルトとシェリーはハッとしてロイを見た。

「ロイ、何か秘策があるのか？」

ロベルトが言った。ロイはフツと笑って、

「もう少し引きつけてからにしようと思ってるのさ。連中に、これ以上はないくらいの屈辱を味わわせてから、脱出する」

「ええっ？」

エリザベスとロベルトとシェリーが同時に同じ言葉を発するなど、これから先もそうそうあるものではない。

「妙だな」

隊長があまりにも静かなクロノスに違和感を覚えた。

「何かあるぞ。おい、クロノスのマニュアルを携帯に転送させろ。

何か我々の知らないことをやろうとしているのかも知れん」

「はっ！」

隊長はクロノスを睨んだ。

「ガキ共に軽くあしらわれるほど、我々は間抜けではない」と彼は呟いた。

ロイは突然部隊が停止したのに気づき、

「どうしたんだ？ 接近するのをやめたぞ」

「感づかれたか？ まずいな」

とロベルトが身を乗り出してスクリーンを見た。シェリーが、

「何かするつもりなのかしら？」

「連中、一般兵じゃなさそうだな。士官学校で噂になってる、特殊部隊かも知れねエぞ。だとすると、ヘタな小細工をするより、さっさと逃げちまった方がいいかもな」

とロベルトはロイを見て言った。ロイはロベルトを見て、

「お前はと思うんだ、ロベルト？」

「俺は、とっとと脱出した方がいいと思う。連中は俺らの浅知恵じゃ太刀打ちできねエツて」

ロベルトの弱気な発言に、ロイは余計に特殊部隊の実力を見てみたい衝動に駆られた。

「このクロノスが、特殊部隊ごときにやられちまうのなら、盗む必要もないってことだよな」

「おい、ロイ、お前何考えてんだよ？ やばいって！ さっさとずらかった方が正解だよ」

ロベルトは真面目な顔で意見した。逆の光景はよく見るな、とシェリーは思った。

隊長はクロノスのマニュアルを携帯で確認していた。

「なるほど。クロノスはV S O L（垂直離着陸・短距離離着陸可能機）なのか。ガキ共の狙いがわかった」

隊長はニヤリとした。

「我々が接近したら、同時に垂直離陸して、一気にここから脱出するつもりだ。司令部に連絡。クロノス離陸に備え、対空ミサイルを配備されたしと」

「了解！」

隊長は腕組みし、クロノスを見た。

「対空ミサイルごときで落とせるとは思えんが、足止めにはなる。ガキ共はミサイルの衝撃で目を回して、気絶してしまうだろうから、その時こそ、奪還できる。仮に連中が気絶しなくても、反撃する手段のないクロノスは、袋のねずみになる」

隊長はミサイルでクロノスを攻撃させるつもりなのだ。

「動かないな」

ロベルトが痺れを切らせて言った。ロイは、

「何か準備しているんだろう。こっちはそんなこと関係なく、ここから脱出させてもらうけどな」

ロイは赤いレバーに右手を置いた。

「強烈なGがかかるから、舌を噛まないように気をつけろよ」
と彼はエリザベスとシェリーに声をかけた。

「どれくらい凄いの？」

エリザベスが尋ねた。ロイはニツと笑って、

「すぐにわかるよ」

とレバーを引いた。

「キヤーッ！」

二人の少女の悲鳴が、クロノスの中に響き渡った。クロノスは凄まじい爆音を出し、強力な垂直噴射で急上昇した。

「やはり、それか。愚かなガキだ」

と隊長は勝ち誇って呟いた。

「ムッ？」

ロベルトが体重の何倍ものGに耐えながら、スクリーンの片隅で展開している対空ミサイルに気づいた。

「おい、ロイ、ミサイルが発射されるようだぜ」

「だろうな」

ロイはそれすら预期していたようだ。

「発射！」

隊長の指示で、三発のミサイルが発射された。

「ああっ！」

ロベルトは絶叫にも近い声で叫んだ。

「ダメだ、ホーミングミサイルだ！ 逃げられねエぞ」

「大丈夫だよ」

とロイは答えた。その直後、ミサイルはクロノスに命中した。

「直撃です！」

隊員の歓喜の声に、隊長は、

「当たっただけだ。あんなものでは、傷もつかんよ」

と冷静に言った。確かに隊長の言う通り、クロノスは爆雲の中から、何事もなかったかのように悠然とその姿を現した。

「何だと？」

冷静だった隊長の声が驚愕の色を見せたのは、クロノスがさらに上昇した時だった。

「くっ、ガキ共は何ともないのか。第二撃を撃て。足止めになっていないぞ」

隊長がそう指示した時、すでにクロノスをはるか上空にいた。

「射程圏外です」

隊員の一人が悔しそうに言った。隊長は呆然としていた。

「バカな……。何だ、あの速さは。垂直上昇であの速度、信じられん」

支部長は真っ青になっていた。

「クロノスを奪われた事が本部に知られたら、銃殺されるぞ。何としても、奪い返すのだ！」

と彼は周りの人間全員に怒鳴り散らした。

すぐにクロノス追跡隊が編成され、10機の戦闘機と、3機の哨戒機が発進した。

「やはり連中、反乱軍と通じていたのでしょうか。クロノスが飛び去ると同時に、反乱軍も退却して行きました」
と参謀が言った。支部長は腕組みをして、

「その可能性は大いにあるな」

と呟いた。しかし真相はそうではない。反乱軍は、クロノスが発進したのを見て、カンサイ支部の反撃が始まったと勘違いし、退却しただけだったのだ。戦争とは、そうした誤解や勘違いで、戦局が大きく変わる事があるものなのかも知れない。

「何とか脱出できたな」

とロベルトが言うと、シェリーが、

「もう、いい加減にしてよ。あんな凄いGがかかり続けたら、私の抜群のプロポーションが崩れちゃうところだったよ」

「はア？」

ロベルトのバカにしたような声に、シェリーはムツとして、

「後で覚えときなよ、ロベルト！」

と怒鳴った。ロイはオートパイロットを作動させ、席を立てエリザベスに近づいた。

「大丈夫か、エリー？」

「ええ。ちよつとびっくりしたけど」

エリザベスは思ったより冷静な自分に驚いていた。

「あと数時間で、ニュートウキョウだ。そこからが、また一勝負だけだな」

とロベルトは言った。

第十章 追跡

クロノス追跡隊が発進した頃、クロノスはトウカイ地区に差ししかっていた。

「ちょっと、ロイ、少しスピード落とせない？ Gがきつくて気持ち悪いんだけど」

とシェリーが言った。ロイは、

「悪いけど、もう少し我慢してくれ。今、スピードを落とすと、追いつかれる可能性がある」

「えっ、どういうこと？」

エリザベスがギョツとして尋ねた。ロイはエリザベスを見て、
「カンサイ支部から、戦闘機10機、哨戒機3機が発進しているんだ。リーダーに捕捉される恐れがある」

「それってやばいじゃないの。仕方ないわ、我慢する」

シェリーは物わかりはいい女の子である。エリザベスと比較して、そこだけは彼女の方がいいなど、ロイが唯一認めるところだ。

エリザベスに知られたら、引っぱたかれてしまうだろうが。

「それにしても、慌てて脱出したから、いろいろ不都合なことがわかって来た」

とロベルトが言った。シェリーとエリザベスはギクツとして彼を見た。

「クロノスは元々発進予定がなかったから、エネルギーである燃料電池を本来5基搭載していなければならぬんだが、3基しか積んでいない」

「ということは？」

とシェリーが恐る恐る尋ねる。ロベルトは、

「つまり、このままだと、どこかに降りなければならぬってことだ」

「ええっ？ 捕まっちゃうじゃないのよ！」

シェリーは大声で言った。するとロイが、

「大丈夫だ。今、対レーダーコートをした。これで少しは時間が稼げるよ。スピードを落とすぞ」

と答えた。シェリーとエリザベスは、ホッとして互いに微笑み合った。

「あつ、そうだ！」

スピードダウンして楽になった身体で、シェリーはバツと立ち上がり、

「この！」

とハイヒールでロベルトの頭を殴った。

「いってエ！ 何するんだよ！」

ロベルトは涙目でシェリーを睨んだ。シェリーは仁王立ちで、
「さつき私のプロポーシヨンのことを鼻で笑ったお礼よ」

「チェッ、執念深い奴だな」

「何ですって？」

「ちよつと、二人共！」

取っ組み合い寸前のシェリーとロベルトの間にエリザベスが割って入った。ロイが、

「寛いでいる場合じゃないぜ。お空の目はまだ俺達をキッチリ捉えているし、各支部のソナーに引かかる恐れもある」

「そうか、監視衛星があつたな。ソナーの探知を逃れるのは、クロノスにもできないしな」

ロベルトがシェリーから離れてロイに言った。ロイは頷いてロベルトを見て、

「今現在、どこの基地からも追跡機は発進していない。カンサイ支部の追跡隊は完全に振り切ったから、いますぐに何かあるわけじゃないが、これから向かう先は、軍本部のあるニュートウキョウだからな」

「そうだな。やばいよな、確かに」
とロベルトは真剣な表情で呟いた。

支部長は、クロノスがリーダーから忽然と姿を消したという報告を受け、絶望的になっていた。

「クロノスを奪った子供達は、クロノスのマニュアルでも持っているというのか。対リーダーコートを使ったようだな」

「はア………」

参謀もその言葉に応じるだけで、何も考える気力がないようだった。

「すでに本部はクロノスの動きを監視衛星で捕捉しているだろう。我々は軍法会議にかけられてしまうな」

「………」

支部長の言葉に、参謀は血の気が引いてしまった。そうなれば、間違いなく銃殺刑だからだ。

リノスのヘリは、すでに朝靄煙るチョーフの飛行場跡地に到着していた。彼は同行した5人の部下と共にヘリを降り、ロイ達の到着を待っていた。

「傍受した軍の無線によりますと、クロノスはトウカイ地区に入っただけで、リーダーから消えた模様です」

と部下の一人が報告した。リノスはニヤリとして、

「うまくやったらしいな、ロベルトの相棒は。予定ではあと一時間ほどで到着する。楽しみだな」

と言った。すると別の部下が、

「しかし、軍本部の監視衛星が稼働しているようですし、各支部のソナーも探知する可能性があります。まっすぐここに辿り着けるかどうか………」

と報告を付け加えた。リノスはその部下をキッと睨みつけ、

「その程度の事をぐり抜けられなくて、何が秘密兵器だ！ 何の問題もない。クロノスはここに来る」

と言い返した。部下は恐れおののき、身を縮ませて下がった。

カンサイ支部の支部長の心配していた通り、軍本部はクロノスの動きを捕捉していた。

本部はすぐに、クロノス撃墜を決定した。奪還するのは不可能と判断したのである。

敵の手に渡るくらいなら、破壊する方が得策と考えたのだ。

本部から次々に戦闘機が飛び立ち、クロノス撃墜に向かった。

「クロノスがいくら強力な兵器とは言え、盗み出したのがガキでは、たかが知れている」

と本部長は呟き、ニヤリとした。

本部は各支部に秘密で、調査員を潜入させていた。だから支部の動きなど筒抜けなのである。隠し事をしているつもりでも、全部知られていたのだ。

「責任はカンサイ支部に押しつけ、手柄だけ私が頂くとするか」

本部長は狡猾な笑みを浮かべて、一人悦に入っていた。

「ロベルト、どうやら軍本部が動き出したようだぞ。5機の戦闘機が、こちらに向かっている」

とロイがレーダーを見ながら言った。ロベルトは舌打ちして、「やばいな。そこら中の基地から、クロノス撃墜の戦闘機が飛んで来たら、武器らしい武器を積んでないから、ホントにまずいことになるぞ」

ロベルトの言葉に、シェリーが、

「ちょっと、何言ってるのよ？ 何とかしなさいよ。考えなさいよ！」

「うるせエな。そんなこと言われなくたって考えてるよ。どうすりゃいいのかな！」

ロベルトは苛ついていた。

逆にロイは冷静だった。

エリザベスの頼みは、ロイのこの冷静さだった。

「なア、ロベルト、ホントにクロノスは装備が不十分なのかな。俺にはそんなことはないように思えるんだけど」

ロイの楽観的な言葉に、ロベルトは呆れたようだ。

「クロノスはプロトタイプで、実戦に対応してないんだ。武器はついてないし、燃料電池だって、十分じゃないだろ。だから、まずいんだって」

ロベルトの反論に、ロイは、

「その燃料電池なんだけど、さっきからほとんど消費してないんだよ。俺もちょっと意外だったんだけどさ」

「どういうことだ？」

ロベルトは燃料電池のゲージを見た。確かにまだ十分残量があった。

「クロノスの実体は、カンサイ支部にすら、隠されていたんじゃないかな？ いや、もしかすると、軍本部にも」

「まさか。じゃあ、真実を知ってるのは誰なんだよ？」

「デイズムだけってことさ」

ロイの答えに、ロベルトはギョツとした。

「あのオヤジなら、やりかねねエな」

「ああ」

それがロイの冷静さの根拠だったのだ。クロノスがただのプロトタイプだったら、四人の運命は風前の灯火であるのだが。

第十一章 敵機との遭遇

軍本部から発進した5機の戦闘機は、本部の索敵コンピュータと監視衛星からの情報を元に、クロノスの飛行経路を割り出し、先回りするべく、飛行していた。

「クロノスって、確か一機というより、一隻と言った方が正しいくらいでかい奴だよな」

とパイロットの一人が、誰にともなく無線で話しかけた。すると別のパイロットが、

「ああ、そうだ。フル装備すれば、我々の搭乗している一般の戦闘機では、とても太刀打ちできない化け物さ。だが、今のクロノスはプロトタイプだ。だから実戦配備されたものではない。こちらの方が、圧倒的に有利さ」

と答えた。またもう一人は、
「それに搭乗しているのは、ガキらしいじゃないか。演習より簡単に、任務完了になるはずだ」

「そうだな」

しかし彼らは甘かった。クロノスは彼らが考えているような、軽装備の戦闘機ではなかったのである。

ロイ達は、ニュートウキョウ付近まで来ていた。

「ここからどこへ行けばいいんだ、ロベルト？ リノスはチョーフにいるらしいが、お前の本当の取引相手がいるのはどこなんだ？」

ナビゲーションシステムを操作しながら、ロイが尋ねた。

「ウラヤスだ。ヒュプシピュレ・カオスっていう、とんでもなく奇麗で危険なお姉様さ」

とロベルトが言うと、シェリーがキツとして睨んだ。

「あんた、そんな話、初耳だよ。どういう女なのさ、そのヒュプシ何とかっていうのは？」

ロベルトはシェリーの剣幕に気圧されながら、

「暗黒街のボスの存在さ。リノスなんかより、ずっと金を持ってるし、力もある。二億で話がついてるよ」

「二億？ 即金でか？」

ロイが仰天して尋ねた。ロベルトはフフンし得意そうに鼻を鳴らして、

「ああ、もちろんだ。その怖いお姉様を裏切ろうっていうんだから、覚悟がいるぜ、ロイ。地の果てまで逃げても、逃げ切れないかも知れねェ」

「それでも逃げるまでさ。俺達は無敵の戦闘機に乗っているんだからな」

とロイは微笑んで言った。ロベルトは肩を竦めて、

「そうだったな。戦局が変われば、クロノスは無価値になるかも知れないから、それに賭けてみるか。金にならないものを、ヒュプシピュレさんも追いかけてたりしないだろう？」

「そうだな」

ロイは前を見て言った。そして、

「どうやら完全に見つかっちゃったようだぞ。5個の機影が、こちらに急速に接近して来ている」

「接触までどのくらいだ？」

ロベルトはゲージを確認して尋ねた。ロイは、

「一分てとこかな」

「逃げられないの？」

とエリザベスが口を挟んだ。ロイは至って冷静に、

「そいつは無理だ。5機はクロノスを囲むように接近している。監視衛星からの情報で、こちらの動きは手に取るようにわかっているさ。どこに逃げても、すぐ追いつかれる」

「そんな……」

エリザベスはシェリーと顔を見合わせた。

「装甲の強さは、カンサイ支部で実証済みだから、強行突破するか

？」

とロベルトが言った。ロイは、

「いや、無理だよ。対空ミサイルと、戦闘機に搭載されているミサイルでは、破壊力が違う。いくらクロノスでも、無傷ってわけにはいかないと思う」

と悲観的だ。ロベルトが何か言おうとした時、

「来たぞ！」

とロイが叫んだ。レーダーにも、そして正面のスクリーンにも、確実にクロノスに迫る機影が確認できた。

「目標確認。これより撃墜行動に入る」

戦闘機のパイロット達は、連携しながらクロノスを囲むように飛行し、次第に距離を詰めて来ていた。

「ロックオン完了。発射！」

5機の戦闘機から、一斉にミサイルが発射されて、クロノスに一直線に向かって行った。

「ミサイルか？」

とロベルトが叫んだ。エリザベスとシェリーは手を握り合って目を瞑っていた。ロイは、

「かわす事は無理だ。どうする？」

と自問した。その時だった。

「何だ？」

ロイの席の脇にある計器類が勝手に動き出したのだ。

「何だ、一体？　何が始まっているんだ？」

ロベルトも仰天していた。二人の声にエリザベスとシェリーも目を開けた。

「ああっ！」

その時まさにミサイルがクロノスに接近していた。

「これまでか？」

とロイが呟いた時、クロノスの装甲の一部が開き、そこからミサイルランチャーが現れた。

「何だ、あれは？」

戦闘機のパイロットの一人が呟いた。

次の瞬間、ランチャーから無数のミサイルが発射され、5基のミサイルは全て撃墜、そして5機の戦闘機も、瞬く間に爆発して消滅してしまった。

「……………」

ロイとロベルトは声も出せずに互いの顔を見た。エリザベスとシェリーは震えながら抱き合った。

「た、助かったのか、俺達？」

とやっとロイが言った。ロベルトはグツタリと席に座り、

「そのようだな。何が何だかよくわかんねェけどさ」

と応じた。

「さてと。取り敢えず、どうする？」

とロイが尋ねた。ロベルトはロイを見て、

「ウラヤスに向かおう。何にしても、お姉様にちよつとだけ誠意を見せておかないとな」

「とか何とか言って、色香に迷って考え変えたりしたら、只じゃおかないからね！」

シェリーの迫力満点の声に、ロベルトばかりでなく、ロイまでギクツとして固まってしまった。

「全機撃墜、だと？」

本部長は、思っても見なかった報告に啞然としてしまった。

「クロノスには、ミサイルランチャーが搭載されていたようです。一号機からの配信映像で、確認されました」

と報告に来た参謀総長が言った。

「このことが、ジョリアス長官の耳に入ると、まずいことになるのでは……………」

「うむ．．．．」

責任はカンサイ支部に押しつけて、手柄だけ頂こうと思っていた
本部長は、途方に暮れた。

リノスもまた、クロノスが5機の戦闘機を撃墜したという情報を
得ていた。

「やはり、クロノスは完成していたのだ。恐らく、ディズムの秘密
主義のせいで、軍の大半の者が何も知らされていないのだ。スキュ
ラ作戦が成功し、核融合砲でセカンドムーンを破壊した今、後は月
の裏側をクロノスで叩くだけだからな」

リノスはニヤリとした。

「早く来い、ロベルト。お前にも礼をせんといかんからな」

その顔は、とても礼をしようという者の顔ではなく、謀略者の顔
であった。

しかし、リノスは待ちぼうけを食わされた。

いつになってもロベルト達は、チョーフに現れなかったのだ。

騙そうとして騙されたリノスは、怒りのあまり、ヘリのコクピッ
トを破壊し、飛行不能にってしまった。それはまた後日わかったこ
とであるが。

エピソード 戦いの終息

クロノスがニュートウキョウ上空に現れた事により、軍本部でも内部分裂が始まった。

「何ということだ！ クロノスと、あのカシェリーナとかいう女のせいで、本部にまで造反者が現れおったか」

本部長は基地の各部署で起こっている小競り合いに苛立っていた。「ディズム総帥は行方不明だと言うし、長官は反乱軍に投降したという噂が流れているし……」

本部長は外で聞こえる爆発音と銃声にギョツとした。

「ついにここまで来たのか？ 嫌だ。私は銃殺されるのは嫌だ！」
彼は見苦しくも、逃亡を図ろうとして基地の裏手に向かって走った。しかし無駄な抵抗であった。本部長はほどなく造反組によって捕獲され、監禁された。

各地で抵抗していた正規軍も、クロノスが味方ではないと知り、次々に投降した。

反ディズム軍は、軍本部に突入し、地下室に監禁されているレージン・ストラススキーを救出した。

「ここが、ニュートウキョウか。ほとんど焼け野原だから、どんな街かよくわからないな」

スクリーンに映るニュートウキョウの風景に、ロイが呟いた。

「ヒュプシピュレと連絡がとれない。彼女の屋敷に、誰もいないみたいだ。困ったな」

とロベルトが言うと、シェリーが嬉しそうに、

「良かったじゃない、ロベルト。相手が行方不明じゃ、取引は無効だね」

「二億がパアだ」

ロベルトは酷く落胆していた。シェリーはそんなロベルトを見て、

「あんた、やっぱり金のためだったの？ ホント、どうしようもない奴だね」

「うるせェよ」

ロベルトはスネて顔を背けた。ロイとエリザベスはそれを見て顔を見合わせ、笑った。ロイはロベルトに、

「良かったな、ロベルト、軍が崩壊して。もし反対派が負けていたら、士官学校の学生のお前は、軍法会議にかけられていたかも知れないぞ」

と肩を叩きながら言った。ロベルトはそれでも、

「関係ねェよ。二億に比べりゃあな」

とスネたままだ。シェリーはロベルトの頭をポカンと殴り、

「バカは死ななきゃ治らないみたいだね」

「いてェな！」

ロベルトの反応を見て、ロイ達は大笑いした。

ロベルトが取引するわけだったヒュプシピュレは、クロノスの話を直接確認していなかった。彼女の側近が、半分独断で進めていたのだ。

だから、軍が瓦解し、体制が変わってしまったため、クロノスの価値が暴落したと判断し、逃亡したのだ。

もちろん、ヒュプシピュレ自身も、恋人である殺し屋のカロン・ギグネイと共に姿を消していたのだが。いずれにしても、ロベルトの手元に二億という大金が転がり込むことはなかったのである。

やがて軍本部も完全に制圧され、ニーストウキョウの戦いは終息した。

「カシェリーナさんが来てるらしいぞ」

反対派の通信を傍受したロイが嬉しそうに言った。途端にエリザベスの機嫌が悪くなった。ロイはその異変をすぐに察知したが、遅かった。

「だから？」

彼女はロイに詰め寄った。ロイはエリザベスの声に全く抑揚がないのに気づき、

「いや、その、なんだ、ここまで来たついでに、地球を救ったヒロインのご尊顔を拝謁しようかな、なんて思ったんだけど」

と恐る恐る言ってみた。するとエリザベスは、

「いいわよ、別に。どうぞご勝手に。そのかわり、帰りは歩きでお願いします」

「お、おい、エリー！」

今度はロイが笑われる番だった。エリザベスは、

「戦いはニュートウキョウだけで起こっているんじゃないでしょ？」

他の場所にも行って、止めないといけないわ」

と提案した。ロイは渋々それに同意し、

「わかったよ。ニューペキンも戦闘が終結していないらしいから、ニューペキンに飛ぶぞ」

「了解！」

ロイがカシエリーナに会いに行くのを断念したので、エリザベスは上機嫌で応えた。

「絶対、尻に敷かれるぞ、お前」

とロベルトが嬉しそうに小声で言った。ロイはムスツとして、

「お前に言われたくないよ」
と言い返した。

ニューペキンは、ニュートウキョウに次ぐ激戦地だったが、クロノスが上空に現れると、次第に戦いは沈静化に向かった。ニューペキンの正規軍も、ニュートウキョウの話を知っていたためである。クロノスの情報は、様々な手段で地球中に伝わり、戦いは終息に向かって行った。

ロベルト達に騙されたりノスは、正規軍が崩壊して、反対派が軍

本部を制圧した事を知ると、たちまちチョーフから逃げ去った。

「ロベルト、覚えていろよ。この礼は必ずさせてもらうぞ」

トリノスは調達したボロボロのトラックの助手席で、酷い揺れに悩まされながら呟いた。

そんな捨て台詞を吐いたりノスだが、その悪行が祟って、一新された共和国軍と警察にマークされ、逃亡生活に入らざるを得なくなった。ロベルトに「お礼」をするどころではなくなってしまったわけである。

ロイ達は知るべくもなかったのであるが、彼らの行動がディズムを核融合砲のある基地に行かせる遠因となり、同時にクロノス以降を考えて、秘密裏に進められていた「サードモンスタープラン」が挫折するきっかけにもなった。

ロイ達はクロノスをディズム反対派にマニュアルと共に引き渡した。

本来なら大変なことをしたわけだが、クロノスを開発したディズム派の一団が崩壊し、体制が変革したため、彼ら四人の行動は何のお咎めもなくなった。

ロイ達はしばらく事情聴取を受けた後、軍のジェットヘリでカンサイ地区まで送ってもらった。

戦いは確かに終結した。

しかし、ディズムの影武者のうち、生き残ったはずの四人の行方が、地球共和国と月連邦の終戦協定が結ばれた頃には、すでにわからなくなっていた。

本当に戦争は終わったのか？　ロイはそう思った。

これが聖少女　カシエリーナ　もう一つの戦争の全編である。

エピソード 戦いの終息（後書き）

自作解説

神村律子

聖少女カシエリーナのサイドストーリーとして考案したのですが、何となくリンクした話になってしまいました。

次回作「聖女カシエリーナ サードモンスタープラン」で、このお話の少年少女が、カシエリーナ達と行動を共にすることになります。次回作は書き直しがかなり多いので、多分秋くらいになると思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8636e/>

聖少女カシェリーナ外伝 もう一つの戦争

2011年11月17日03時54分発行